

言語の背景には国民性や価値観がある

田 口 知 弘
朝日大学・ドイツ語研究室

Bei dem Hintergrund von Sprachen gibt es einen Volkscharakter und Wertvorstellungen (Linguistik)

Tomohiro TAGUCHI
Asahi Universität

Zusammenfassung

Jedes Sprachgebiet beinhaltet seine eigene Ansichtswiese von Wertvorstellungen und Dingen hat als Hintergrund eine andere Vorstellung von Sprache. Darin sind der Volkscharakter, der Regionalismus und gleiche Attribute verwurzelt.

Im Schwedischen heisst „omsorg“, die Trauer zu teilen, und solche Wertvorstellungen, die der Volkscharakter besitzt, entstehen aus dem Ausgangspunkt des Lebens. Die Sprache, die das bürgerliche Leben entscheidend beeinflusst, zeigt einen flüchtigen Blick in das Innere von Kultur und Gewohnheiten der Gruppen.

Wenn man dabei noch tiefer in den Sprachgebrauch eindringt, wie bei der Denkweise, die im Englisch-Gebiet zur Schlussfolgerung führt oder bei der Denkweise aus Prozessen im deutschen Sprachgebiet, so ist die Methode des Ergebnisses je nach Sprachgebiet verschieden.

Die Abschlussmethode und die Art und Weise der Lösung für die Sache sind verschieden, und das hängt stark vom Volkscharakter ab.

Japanisch ist eine Sprache mit einer hohen Empfindlichkeit, die sich um die sie umgebenden Menschen sorgt. In den Englisch-Gebieten sind nur japanische Einsilbigkeit und japanische Bescheidenheit eine japanische Wertvorstellung, im Ausland verneint man die japanische Tugend.

Daher ist der Charakter ganz anders bei Menschen, die Japanisch sprechen wie bei Menschen, die Englisch sprechen. Bei der Selbstverantwortungsgesellschaft in Amerika ist die entsprechende Art und Weise unterschiedlich, auch die Art und Weise die Verantwortung zu übernehmen ist anders.

Wenn man in der japanischen Gesellschaft einem Vorgesetzten gegenüber widerspricht oder Einwände erhebt, so entsteht die Hauptursache der persönlichen Reibung.

Wenn man sich mittels Sprache nicht an die Umgebung akklimatisiert, dann gehen die zwischenmenschlichen Beziehungen schleppend voran und man weicht letztlich vom Rahmen der Gruppe ab.

Deutschland wird so wie in Amerika allmählich zu einem Immigrationsstaat werden. Wenn die Immigranten immer zahlreicher werden, braucht man noch mehr die Klarheit der Sprache, um die Mauer der Mentalitäten, die es in einem Vielvölkerstaat gibt, zu überwinden.

要 旨

それぞれの言語圏にはそれぞれの価値観や物の見方・考え方が含有し、異なった言語観が背景にある。そこには国民性、地域色、同属性が根付いている。スウェーデンの〈オムソーリ（悲しみを分かち合う）〉など国民性が持つ価値観が生活の原点に生きている。市民生活を左右する言葉がその集団の文化と慣習の中に垣間見ることができる。

さらに言語使用を掘り下げて考えると、結論から導く英語圏論法、プロセスからのドイツ語圏論法など、言語領域によって結論の導き方に差異がある。物事の決着方法や解決手段は様々であり、国民性に依拠するところが大きい。

日本語は周囲の人々に配慮した感受性の高い言語である。英語圏の中にあって、日本的な寡黙さや謙虚さはあくまで日本的価値観であって、外国では日本の美徳は打ち消されてしまう。従って、日本語を話している時の人間的気質と英語を話している時の人間的気質が異なっている。自己責任社会であるアメリカでは対応の仕方も異なり、責任の取り方も大きく異なっている。日本語社会は目上に向かって反論したり異議をとなえるときぐしゃくする要因になる。人が言葉によって周囲と馴染まない人間関係がうまくいかず、集団枠からはずれてしまう。

ドイツはアメリカと同じように移民族国家になりつつある。移住者が多くなってくると、多民族国家間にあるメンタリティの壁を越えるには、言葉の明白さがより一層必要とされるのである。

I 様々な言語観

社会福祉の充実しているスウェーデンはドイツ以上に人間が共生して生きる知恵を持って生きている。言葉は生活する人々の気持の象徴である。スウェーデン語の<オムソーリ（悲しみを分かち合う）>は心優しい穏やかな社会（friedliche Gesellschaft）の人間の営み（Treiben）を表現する一つの言葉である。多くの国民や民族の中には人間生活の営みや生き方を表現している言葉が多々ある。そこには国民性（Volkscharakter）の持つ言語観（Vorstellung von Sprache）がある。言葉の裏付けとして、異なった言語感覚（Sprachsinn）を持っている人たちはまた別の生活の知恵を持っている。

日本語は周囲の人々に配慮する感受性（Empfindlichkeit）の高い言語である。従って、同じ人間であっても日本語を話している時の人間的気質（menschliche Gemütsanlage）と英語を話している時の人間的気質が異なって現れる。会議の決定や仕事の決断をしなければならない時、日本人はまず会合や小委員会を開いて全体で納得しコンセンサスを得ることから始める。まず段取りをし、一人で手掛けず一人で決めず、みんなで決める。日本では、個人で決めてしまうことは全体から快く思われぬ。だから即断即決がなく、意見対立を避け、全体責任で事を進めて決めている。「日米のビジネス・コミュニケーションで、誤解の例として取り上げられているのが、日本人はだれが責任者なのかがわからない。――日本語は無意識のうちに動作主を隠す言語なので、それをそのまま英語にすると非常に曖昧なものになりやすい。」⁽¹⁾と、自己責任社会のアメリカでは言行不一致の場合、個々人の責任の取り方は日本より重い。自分が話した言葉に責任が付随しているからである。言葉の対等性（Gleichwertigkeit）という点で、日本とアメリカでは大きな差がある。「日常アメリカ人が好んで用いる<チャレンジ>という言葉にかかわるものである。ナンシー・坂本と直塚玲子の Polite Fictions（1982）は、身近な日常レベルから日米の比較文化を扱った名著として知られている。――その中で、あえて相手の発言に異をと立て、会話を発展させることを、彼女たちは<challenging>という言葉で呼んでいる。そして日本では失礼な態度とされるこの<challenging>な行動は、英語の世界ではむしろ当然のこととされ、それは目上に向かってでもなんら礼を失うものでないということが強調される。――このように日常の会話で異をと立てることがむしろ歓迎されるのは、アメリカ社会では人々がそれぞれに独自のものを持つこと自体が望ましいと考えられるからだ――それはやはり、集団的な価値を志向し、謙譲を美德とする傾向の強い日本人の人生態度とは異なっている。」⁽²⁾日本社会は目上に向かって反論したり異議をと立てると、ぎくしゃくする要因になる。ここには言葉の対等性はなく、言葉が周囲と馴染まない人間関係が

(1) 白井恭弘、『外国語学習の科学』、岩波新書、2008、P.26

(2) 谷本誠剛、『物語にみる英米人のメンタリティ』、大修館書店、1997、P.22

生じ、枠からはみ出してしまう。英語圏感覚と日本語感覚の切り替えができるかどうか、多言語社会に生きるこれからの日本人に必要な知恵かもしれない。

アメリカの価値観の影響として、「アメリカによる日本占領は政治・経済・文化・思想などにおいてそれまで日本人が持っていた価値観や人生観を覆し、アメリカ的民主・自由・平等の思想、あるいは衣食住の生活習慣が取り入れられ広がっていった。このアメリカ化そしてアメリカへの憧れは言語面では外来語や英語の〈価値〉を相当に高めたと推測される。まさに終戦までの外来語排斥の正反対を行く動きである。また、現在〈敬語の乱れ〉論議がかまびすしいが、これもアメリカのもたらした民主平等思想が背景にある。つまり、それまでの儒教倫理が要求していた、たとえば上下意識からくる〈型〉が衰退し、代わってそこに平等意識と個性の発見が要求されたのである。敬語はひとつの型であり制度であるから、儒教倫理の衰えとともにその社会的機能も減じていったというわけである。また、方言や若者語など非標準の変種が堂々と自己主張できるようになってきたのも同根である。もちろん、男女平等思想は女性語にも影響を与えた。」³⁾かつての日本の家父長的年功序列社会は核家族 (Kernfamilie) 化によって大家族構造の総崩れになっている。核家族化の流れは、子どもの頃から常に親は対等な話し手として対応し、その家庭環境にある現代の若者たちは敬語 (Höflichkeitsausdruck) のデリケートさ (Delikatesse) に気付かないで生活していることも事実である。かつての三世代家族が同居し生活していた頃の序列意識 (Reihenfolgebewußtsein) の強かった生活習慣はほとんどなくなってしまった。

現在では、団体行動や学校・クラブのスポーツ活動に参加しない限り、縦社会的言語使用は皆無に近いのである。日常生活は横並び社会の言語感覚になり、だれもが友達感覚である。その友達感覚言語で育った若者たちが就職活動に直面した時など、相手によって言葉の使い分けしなければならない日本語に気付き、敬語のデリケートな (delikat) 対応に直面し、一般社会の潜在的序列意識の存在に驚くのである。

同じ国内でも対話をしている時の状況は関東と関西では異なっている。関西弁で話すことで相手への追及を和らげる心理的な働きがあるように、各地方の言語には本音 (ein wahres Wort) と建前 (ein grundsätzliches Wort) が微妙に相違している。

一方で、言葉が宗教的価値観、物の考え方、思想信条を介して存在している。「キリスト教文化圏と日本では随分異なる言語観をもっている気がする。キリスト教文化圏では人は一人一人違うので、お互いの心を通じさせるために言葉は同じ意味でなければならないと考えている。いうならば言葉の意味は透明である。それに対して日本語は相手によって発せられた言葉は、受手の心を経過する中で違ってくると思う。つまり言葉は通じないという認識をしている。

(3) 陣内正敬、『外来語の社会言語学』、世界思想社、2007、P. 153, 154

なぜキリスト教圏では通じると考えるかという、唯一絶対の神によって言葉が保証されているからである。日本だけでなく、たぶん多神教文化圏はそれぞれの心が異なることが前提となっているから、それぞれ異なる神々を信仰するように言葉の意味も多様だと感じられる。』⁽⁴⁾と、イスラム教圏 (islamische Gebiete) にはイスラムの価値観があり聖典コーラン (Koran) を抜きにして考えることはできない。同一宗教社会には言語の心情的透明性、いわゆる以心伝心 (Wo Verstand ist, braucht es nicht viel Worte) 的な考えが流れている。共通するキリスト教聖書 (Bibel) やイスラム教聖典コーランの解釈による生き方が、それぞれの原典に含有しているからであろう。逆に、かたくなな宗教観の相違から、相手の言葉・信条に耳を傾けることのできない宗教対立を生み出している。

このグローバル化社会にあって、人の流入流出はキリスト教圏であれイスラム教圏であれ、自分の持つ信仰宗教と対峙して生活することが多くなっている。自分の信仰宗教と異なった他宗教圏に在住すれば、改宗しない限り異教徒として、生活しなければならない。異教徒として在住した場合、同一宗教・同一言語を持つ人々のコミュニティーが形成される。そのコミュニティーは同一言語・同一宗教の絆を持つグループとして仲間意識が強くなっていく。ヨーロッパ社会の中に移住してきたイスラム系、そして旧ユーゴスラビア系の人々はその一例である。そこには妥協できない宗教上の壁が存在している。宗教観の違いは生き方・信条の相違であり、それぞれの宗教観を介して話す言葉は、異なる宗教の人たちには真の言葉の意味として通じていないのである。

II 意志疎通手段

若年世代と中高年世代には言葉の世代間ギャップがある。日常の言葉も聞きづらい雰囲気させられる場面が多々ある。さらに言動や考え方に対する時代ギャップから言葉を介して思わぬ場の悪さに遭遇することがある。いつの時代にも世代間相違によって同じことが言われてきた。〈最近の学生は――、近頃の若者は――、〉など、前世代の人たちからの言葉として若者に対する生活態度を批判し、時には説教 (Predigt) になったり、命令調の苦言で伝わっている。前世代の立場から見れば、若者の言動は歯がゆく腹立たしい一面しか見えていないのかもしれない。その点、言葉を介さない携帯メール普及は若者たちの時代に合っている。省略文字利用や擬態語や擬音語 (Onomatopöie) で簡単に気兼ねなく気持を伝え、お互いの仲間意識を確認し、互いに傷つきたくない気持が働き、うまくコミュニケーション手段として利用されている。

(4) 武蔵大学人文学部編、『多言語多文化学習のすすめ』、朝日出版社、2008、P.286

相互に意志疎通 (Verständigung) するためには、人が思っていることをストレートに直接対話する方法もあれば、気持ちを汲んで緩衝剤として婉曲的に話す (Euphemismus) 間接的対話など、それぞれの持つ言語域内の特性がある。その言語域内の常識 (gesunder Menschenverstand) と思われることが必ずしも相手の言語域内では同じ意味に合致して伝わっていないことも多々ある。さらに黙っていることもドイツの諺にあるように、Reden ist Silber, Schweigen ist Gold. Schweigen ist auch Antwort. とあるように、沈黙も一つの回答である。「古代ギリシア人が、自分たちのことばを理解しない異族をバルバロイと呼んだときのバルバロイ (蛮族)、いなそんな古い話を持ち出さずとも、いままさに、現代でも、隣りの異族のことをくことばの話せない><おし>だと呼んでいる言語がある。それはロシア人がドイツ人のことをネーメーツ (Немец) と呼んでいる場合だ。」⁽⁵⁾と、言葉話すことはできても<思い>が通じない、まさに語源が生まれた頃にはドイツ人はロシア人にとって、異言語間で話や思いが通じない民族であったにちがいない。

英語圏の中であって、日本的な寡黙さ (japanische Einsilbigkeit) や謙虚さ (Bescheidenheit) はあくまで日本国内の礼儀作法 (Manieren) であり日本的価値観であって、英語圏では日本の美德 (die japanische Tugend) は打ち消されてしまう。とくに、対話は英語圏の中に入ると喋らないと能力がないのではないかと思われる。やはり<郷に入っては郷に従え (Andere Länder andere Sitten)>である。

多民族的な色合いが強くなりつつあるドイツ社会では、全人口の約一割近い人たちが外国人移住者である。多国籍移住者が多くなってくると自分の言いたいことを明確に言葉で表現しないと話の内容や思いは通じない。「現在では外国人労働者において、とくに深刻な問題になりつつある。特に、子どもの世代においてドイツ語ができないことは、新たな下層社会を形成することを意味するからである。」⁽⁶⁾と、ドイツはアメリカと同じように移民族国家 (Immigrationsstaat) になりつつあり、多民族国家 (Vielvölkerstaat) 間の言葉の壁を乗り越える必要に迫られている。外国人と共生し文化的統合 (Integration) をしていくには言葉の壁の克服がさしあたりの解決策である。ドイツの学校では移住者の母語を利用し、ドイツ語習得授業がなされている。

言葉による伝達は意の解し方が文章表現より曖昧で、相手に独自解釈されてしまうなど信憑性 (Glaubwürdigkeit) や確実性 (Zuverlässigkeit) が低く、相手の都合のいいように自己解釈されてしまう懸念がある。そこで重要なことについては文章化する。さらに重要な約束事は法的文章として契約書 (Vertrag) を作成するなど文章化の意義は大きいのである。ドイツ語は国家統一に伴って文章語 (Literatursprache) で話す政策が進められた。「言語の多様さを

(5) 田中克彦、『ことばとは何か』、ちくま新書、2004、P.85

(6) 須沢通、井出万秀、『ドイツ語史』、郁文堂、2009、P.298

示す身近なもののひとつが方言である。ドイツ語に関して書きことばにおいては方言がほとんど見られないが、話ことばにおいては比較的大きな方言差がみられる。もっとも〈方言〉は狭い意味では言語の地理的な相違を指すが、現代ドイツ語においては地理的な相違のみならず、政治体制による国ごとの相違、社会階層による相違、専門領域による相違、利用されるメディアによる相違など多種多様な相違が観察される。⁽⁷⁾それぞれの言語域内の方言特性は仲間内を結び付ける親近感 (Verwandtschaftsgefühl) を醸成するからである。

文章化したドイツ語は方言に左右されず現代ドイツ語表記されている。一貫した学校教育によって現代ドイツ語文章教育による言文一致 (Übereinstimmung von gesprochenem und geschriebenem Deutsch) の教育方針である。文章ドイツ語は地域性や方言にこだわらずに、共通認識手段として全ドイツ国内のドイツ語理解の一翼を担っている。かつては中央集権的国家として、一国家一言語による言語統一が重要な意味を持っていた。「多様性を認めるという選択にはさまざまな困難が伴う。なぜなら、言語は多様性を究極まで追求するとコミュニケーションの機能を果たさなくなるからである。言語は本質的に社会的なものであり、均質化しようとする力と多様性を求める力の両方が常に作用している。――言語が人間のアイデンティティーに関わる重要な問題であることを認識し、だれもが自国語で表現する権利を尊重する EU の言語政策には未来に対する明確な意志と、理想を現実に変えようとする実行力が認められる⁽⁸⁾」と、言語は社会的機能としてだれにも分かる伝達手段の役割を持っている。だか、経済活動がグローバル化するにつれて、言語を一本化しようという流れが強くなっている。言語の持つ母語としてのアイデンティティーと民族意識が打ち消され多様性がなくなっていく危険性がある。人間にとって母語にすぐる意志疎通手段はない。

Ⅲ 国益手段としての言語

戦争になると言語の果たす役割も愛国主義的 (patriotisch) になってくる。次の文は第一次世界大戦の際、母語強化を力説した文である。

Die Muttersprache ist das Wahrzeichen des Vaterlands.

Die Einheit der Sprache ist die Einheit der Heimat.

Pflege der Muttersprache ist Pflege des Deutschtums.⁽⁹⁾

母語は祖国のシンボルである。言語の統一は故郷の統一である。

母語の育成はドイツ精神の育成である。

あきらかに国家主義的・帝国主義的な (nationalistisch-imperialistischen) 母語イデオロギ

(7) Ibid, P. 291

(8) 武蔵大学人文学部編、『多言語多文化学習のすすめ』、朝日出版社、2008、P. 273

(9) Claus Ahlweiz, Muttersprache-Vaterland, Westdeutscher Verlag, 1994, S. 179

一 (Muttersprachideologie) が背景にある。

第二次世界大戦下、日本はアジアで大東亜共栄圏の日本語教育を展開した。その背景を垣間見て、インドネシア地域に視点を当ててみると、「この国には言語・社会構造・生活様式をことにする数百のエスニシティがあり、20世紀初頭の頃までは<インドネシア>という概念も<国民>意識もなかった。その時期に今日のインドネシアの全域が<オランダ領東インド>として統一的に支配されるようになり、近代的統治機構の樹立と公教育の普及が始まった。こうした政策を進めたのはもちろん植民地行政当局だが、そのもとにおかれた住民の間にもこの領土を<インドネシア>という一体的な領域としてとらえ、その地に独立国家を樹立しようとする意識と運動が広がり始めた。とはいえその主体たるべき<インドネシア>とは、独立運動家の観念のなかに想定されたものにすぎず、現実には無数の断層に引き裂かれた。――大多数のインドネシア人にとって、母語はそれぞれの地方語であり、インドネシア語は学校や公的場面で使われる。ある意味でよそよそしい第二外国語だが、それでもインドネシア語は<国民>統一の象徴とされた。」¹⁰⁾ 同族性・地域性の統一を図る共通言語がこのインドネシア地域には必要であった。オランダによる植民地化さらに日本による植民地支配が民族独立への民族感情を高揚させていた。マレー語が民族間の共通認識する最も手短かな言語となり、相互の連帯の要になっていた。日本語は植民地支配言語であり、この地域の人々に定着させる言語としては、逆に難しい現実と直面していたのである。占領政策 (Okkupationspolitik) に基づく日本語普及のための言語教育が実施されたが、マレー語に対する愛着性、国民感情は植民地支配言語である日本語を超越していたのである。「蘭印と呼ばれたインドネシアを旧宗主国のオランダを降伏させることによって占領した日本軍は、占領地域におけるオランダ語の使用を禁止し、公用語としてのインドネシア語と日本語を使用するという政策を取った。これはインドネシアだけでなく、東南アジア全体に<東亜の共通語>として日本語を普及させようという日本政府の基本ののりだった」¹¹⁾ 当時の日本軍の占領政策の一環として、日本語政策は大きな比重を占めていた。「日本軍政はいうまでもなく日本語をインドネシアの主要語にしようと努力を傾けたが、これは非常に時間を要した。当時すでに戦局悪化の兆しはじめていた日本としては、インドネシアの住民の協力を早急に得なければならず、最も実際的手段として、インドネシア語を公用語に採用しなければならなかったのである。――語学教育の重点は日本語におかれ、その比重は日本語 7 に対して、インドネシア語 2 という偏り方だった。――日本軍政の意図に反して、日本の宣伝道具になるところか、インドネシアの民族意識を燃え上がらせ、この民族意識はのちには日本自身に向けられることになったのである。」¹²⁾ と、当時のインドネシアにおける日本語教育は日本の国益にはならなかった。逆に結果として、様々な現地語がインドネ

(10) 塩川伸明『民族とネイション』、岩波新書、2008、P. 120. 121

(11) 川村湊、『海を渡った日本語』、青土社、1995、P. 121

(12) 増田純男、『言語戦争』、大修館書店、1978、P. 346

シア語に統一され普及したことによって、インドネシア語（マレー語）を介して国内の民族意識の高揚に繋がり、マレー語を介して連帯の絆として反日感情を煽ってしまったのである。

また、日本占領下のシンガポールで、日本語教育は理想と現実のギャップに遭遇した。現地の学校長が「日本語を学ぶことは日本精神を学ぶことだ」と訓示するものの現地の言語感覚にズレがあった。「シンガポールの人たちはもともと複数の言語社会に生きているのが普通の状態なのであり、一つの言語を習得するたびに、その言語使用する民族、国家に忠誠を誓い、その民族、国民に成り切ろうといった言い方が、いかにばかげたものであるかを知っていたからだ。――よき日本人論は日本のような特殊な国家共同体の内部でしか通じない論理というべきものであって、それは決して普遍的でも一般的でもないのである。それが強制となれば、他言語、他民族、他文化に対する圧倒的な抑圧、弾圧になることを私達は知らなければならないだろう。」⁽¹³⁾と、母語を持つ人々への強制的な他言語教育は、逆に母語と愛国心の醸成と植民地支配言語への反感に結びついた一例である。他言語を学ばせることが植民地支配国の利益に必ずしもなっていないのである。

1871年以前のドイツは領邦国家で言語統一もままならなかった。「新たに成立した国民国家（1871年）にとっては、その官庁での言語使用を統一的に規定しそしてこの国家规定を徹底させることが不可欠であると認識された。ドイツ語正書法の統一もこの政策の一環であった。官庁での言語統一規定によって、それまでに官庁用語の中で通用していた多くの外来語がドイツ語化されることになった。スイス、オーストリア、ルクセンブルクはこのドイツ語化に関与していないため、ドイツでは、これらの国々とは異なる官庁用語が多く誕生することになった。主に、官庁用語や公の場の語彙において、スイスやオーストリアのドイツ語とははっきりと異なるドイツ語は「帝国ドイツ語」と呼ばれた。ドイツ帝国特有の官庁用語は、郵便、軍事、建築、鉄道、行政・法律などの領域に顕著にみられる。」⁽¹⁴⁾として国家の成立とともに言語統制も重要な役割を果たし、公務に係わる語彙統一は行政部門の中央集権化につながっていった。

国が戦争状態にあると、母語強調され、愛国心を駆り立て、愛国主義的な言語や他民族言語を卑下した国粹主義的言動が多くなる。第二次世界大戦中、ドイツではヒトラー崇拜と反ユダヤ主義が強くなり、次のような語彙が現れた。「Hitlerjugend（ヒトラー青年団）、Hitlerjunge（ヒトラー青年団員）、Antisemitismus（ユダヤ人排斥主義）、Judenhass（ユダヤ人への憎しみ）、Judenausrottung（ユダヤ人の根絶）、Nichtarier（非アーリア人）、Rassengesetzgebung（人種差別法）、プロバガンダとして：Kampf um Blut und Lebensraum（血と生活圏の戦い）、Sieg des Blutes gegen volksfremde Willkür（異人種の横暴に対する血の戦い）、Konzentrationslager（強制収容所）、Endlösung（終局的抹殺）、Sonderbehandlung（特

(13) 川村湊、『海を渡った日本語』、青土社、1995、P.98

(14) 須沢、井出、『ドイツ語史』、郁文堂、2009、P.284.285

別処理＝ガス室の抹殺)――民族の優越性を謳いあげ、結束を固め、領土拡張のための闘争心をかきたてるために Arier (アリア人)、Blut (血)、heilig (神聖な)、ewig (永遠の)、Glaube (信念)、Kampf (闘争) といった言葉を随所にちりばめて、人心を煽りたてた。』¹⁵⁾言語が国益として政治的手段に利用された一例である。戦時下の言葉は戦意高揚と他国を誹謗中傷、プロパガンダ、そして庶民の悲しみは悲惨な言葉に変わり、国家の性格まで変えてしまった。庶民意識を戦争加担へと向かわせる情宣活動手段が言語を媒介にしたプロパガンダである。平和な状況下では穏やかな共存共生 (Koexistenz leben) の言葉が多くなる。

そういう意味で、アメリカはいつも戦争に好戦的な国であり、攻撃的な (aggressiv) 言語観にあふれた社会である。アメリカの国民感情の中にく正義>そして<正当防衛>を盾に戦争を当然視する発想が底流に流れている。民主々義・平和を維持する名目で、国民に対して、その解決手段を戦争肯定に正当化していく国情がある。政治家のアメリカ精神強調から、真の国益にならない言葉のあやにはまり、言葉の扇動に大衆が同調し、好戦的感情になびく風土がある。その風土が<競争>という生き方を助長しているように思われる。

IV 文化教養としての箔付け

ナポレオン戦争前、ドイツの貴族階級はフランス語を使用していた。「ドイツの諸侯たちはフランスの宮廷のきらびやかさと、スペイン風の教育を受けて世界をあまねく支配する皇帝カール5世 (1500~1558) の例にひかれて、フランスこそが教養と趣味のあらゆる問題で及びがたい模範であるというドクマの基礎を作ったのである。』¹⁶⁾と、フランス文化への憧れ、ドイツ語は田舎言葉・農民言葉として扱われ、フランス語こそが上流階級の言葉であった。「カント以前の最大の哲学者であり、外交官としても活躍したライプニッツ (Leibniz Gottfried Wilhelm) は、その著作のほとんどをフランス語からラテン語で書いたが、ドイツ語の洗練についても深い関心を示し、例外的にドイツ語で記した1683年の著書『ドイツ人の理性と言語を改善するためのドイツ人への提言』など2編の論文で、国語の地位を高める示唆に富んだ提案をしている。――ドイツ語洗練のためにロンドン王立アカデミーを手本にその設立を要望していたベルリン科学アカデミーは1700年に設立されたが、ドイツ語の純粋性と自立性の維持を唱えたアカデミー設立の主旨は結局実現されなかった。1744年にはここでもフランス語が公式語として用いられ、その後1812年まで、アカデミーはフランス語とフランス人から解放されることはなかったのである。』¹⁷⁾と、フランス語は文化教養の上位に位置付けされた。

一旦、言語が文化的教養度が高いと世の中から価値付けされると、その方向に言語的価値が

(15) 根本道也、『ドイツ語の標準語』、同学社、2008、P.196.197

(16) Peter von Polenz, Geschichte der deutschen Sprache, Walter de Gruyter, Berlin 1972 (『ドイツ語史』、邦訳、岩崎、塩谷、金子、吉島、白水社、1974、P.116

(17) 須沢通、井出万秀、『ドイツ語史』、郁文堂 2009、P.259.260

加速していくのである。上流階級はその言語に執着し、多くの人々は固定観念によって、外国語の方が自国語 (Muttersprache) より文化度や言語的位置付けが高いと思ってしまうのである。「貴族などの上流階級では、prestige (Prestige) のあるフランス語と、使用人らに対するドイツ語方言という二言語使用の状況にあったが、ナポレオン支配 (1799~1815) からの解放戦争以後、フランス語を敬遠し、徐々に教養市民階級のドイツ語に新たなprestigeを見出すようになってくる。しかしそのドイツ語の中にフランス語の語彙や言い回しが混ざる点が、上層階級のドイツ語の特徴であった。」⁽¹⁸⁾社会層によって言葉がちがうという露骨な言語差別 (diskriminierende Sprache) の時代であった。ドイツ人でありドイツの地に生活しながら上流層はフランス語を話すという一種の言語植民地化 (Sprachkolonisation) した状況がドイツにはあった。身分 (Stand) や職域 (Berufsschicht) によって言語が異なっていた。ドイツの地域語を話していたドイツ庶民は下層民として言語的差別を受けていた。ドイツ語の中にフランス語彙が入っていることに対し、貴族の外国語趣味と言うより、上流階級意識と文化人としての身だしなみと言った方がよかった。貴族階級はドイツ母語の中にフランス語彙を挟み、文化度の高さ、そして身分や権威を誇示する言語使用をしていた。そこには人間に上下差別をつける意識が強くあり、支配層である上流階級だけが話せるフランス語は権威を振りかざすこともでき、下層階級を寄せつけない都合のいい言葉であった。この頃、市民意識の中にフランス語を使えない劣等感、そして上流階級には使える優越感があった。今日その隆盛期に借用されたフランス語が現代ドイツ語に残存している。

いま日本でもカタカナ英語は全ての分野で使用されカタカナ英語が氾濫している。本来の外国語は何か、わからない語源もある。もちろん英語から日本語に直訳できない場合も考えられるが、英語を日本語の中に挟むことによってモダンで進歩的なイメージという感覚で使用し流行度を誇示をしているようなところも見受けられる。「英語は標準的・代表的言語であるという誤解はなぜ生じたのだろうか？これはたまたま、大英帝国、アメリカなど、英語を使用する国が軍事的、政治的、経済的に強かったので、英語が世界で使われるようになり、また、学校の教育でも世界各地で教えられるようになったので、英語は標準的な言語といった誤解が生じたのであろう。英語が今日のように、世界的に広く使われるようになったのは別に、英語が人間の言語の中で、標準的代表的な言語であるというわけではない。」⁽¹⁹⁾として国力による増殖的拡大が主要因である。英語支配は一方で政治支配・軍事支配と結び付き、普遍語として使用されている。どの時代も母語の中に流行の外国語を挟むことによって、言葉の箔付けとして母語の中で運用されてきた。

(18) Ibid, P. 297

(19) 角田大作、『世界の言語と日本語』、くろしお出版、2002、P. 236

V 言語への寛容さ

非英語圏の人たちが英語圏に滞在すると英語が話せて当たり前、話せない方がおかしいと思っている英語母語話者の人たちがまだまだたくさんいる。言葉は英語であるという根強い感覚である。「人間はだれでも自分が慣れ親しんだものを当たり前と思い、馴染みのないものを奇妙なものと思う傾向がある。これは生活様式や物の考え方に限らず、言語についても同様である。例えば対格型格組織の文*(英語など)を話す人間にとって、そのような文は当り前のものであり、能格型格組織の文(エスキモー語など)*は奇妙に映るかもしれない。しかし、逆に、能格型格組織の文を話す人間にとっては、そのような文が当り前であり、対格型組織の文は奇妙なものかもしれない。」²⁰⁾母語にはそれぞれ文型があり、さらに言語リズムがあって、相手にとっては奇妙な音や聴きなれない言語メロデー(musikalischer Ton)に聞こえる。この奇妙な響きの克服から外国語学習は始まる。さらに元々身につけている母語メロデーと切り替える作業が必要になってくる。その切り替え作業が外国語学習で最も労力を要する。それが母語と外国語の距離を縮める最初の学習である。さらに第二言語習得(zweiter Spracherwerb)はその国の文化に近づき、その国の生き方を知ることができる。カタコトの言語学習も奇妙な音声に慣れ、本来持っている自前の母語音声の矯正(Aussprache zu korrigieren)から始まる。この外国語を学んでいる人たちの言葉を母語話者が聴けばみんな発音障害(Hindernis von Aussprachen)、聴覚障害(Hindernis von Gehör)の状態から出発している。そのカタコトを話している外国語学習者に対する母語話者の寛容さが必要である。

私達が第二言語を学ぶ時、すでに身につけている母語力を土台にしながら、第二言語獲得手段としているからである。その学んでいる言語の持つ文化的背景やその言語的対応の仕方、さらにはその言語圏の生き方を真似ることから、次の言語獲得に足を踏み入れている。学ぶ側もその外国語・文化に好奇心をもって「何か文化的にすぐれた物はないか? 生き方の発見がないか?」に関心を持って、その言語に馴染む学習が必要である。そこには文化的価値観や生活の仕方、自分の母語との比較によって他言語文化を吸収できる。

他言語による言語的抑圧、言語による政治的支配など、自らが好まない状況下で他言語使用を強いられた時、その言語はその言語地域の主体性やその地域の政治的発言権を奪う結果になる。「アルザスの言語教育は、21世紀の国際社会が求めるものを明確にしている。外国語の習得を目指すことは、思考や文化の一元化に続くものではなく、世界市民として多文化、多言語を重んじる姿勢を培い、各々の歴史や感性を尊重することを前提としてなされるべきものであ

²⁰⁾ Ibid, P. 37, 38

※ 対格型では、他動詞主語と自動詞主語が同じ格でしめされ、一方他動詞目的語は別の格で示される。前者の格は主格と呼ばれ、後者の格は対格と呼ばれる。この格は世界各地の諸言語に見られる。

※ 能格型格組織は、他動詞目的語の<を>と自動詞主語の<が>が使われなくなり、共にゼロ格になる。他動詞主語<が>はそのまま残る。

例：男が 犬○ 殺した。 目的語、○<を>なし
男○ 行く。 主語、○<が>なし

この言語は豪州原住民、インド北部、コーカサス諸言語、チュクチ語(シベリア)バスク語、エスキモー語、マヤ語で使われている。

り、多様性を認め、共存を目指そうとする人間社会の豊さを希求する態度のあらわれである。』⁽²¹⁾として、多言語共存が人間社会の豊かさの原点となっている。アルザス社会の精神的ゆとりは共存意識を生み出しているのである。この地域はEUの言語政策の象徴的言語領域である。フランス領域でありながら、90年代の小中学校教育で再びドイツ語であるアルザス語(Elsässisch)が教えられるようになったことから、二言語併用(Bilinguismus)地域として生かされている。度重なる戦争で統治支配が変わるごとに言葉がフランス語になったり、ドイツ語になったりと、さらに家族間においても親子世代によってフランス語世代・ドイツ語世代と言語使用に翻弄され続けてきた人々である。このアルザスの現状を憂いたアルザス出身の劇作家ミュールは「これをアルザス人のアイデンティティの危機との考えに、そのひとの魂を尊敬することはそのひとのこばを尊敬すること」⁽²²⁾として言葉の魔力(Sprachzauber)を信じてアルザスに生まれた人たちがアルザス語を生かすことのできる文化活動を展開したのである。

概して、英語圏の人たちは自分たちの言語の優越性を過信して、自分の国で他言語習得努力をしていない。いつでもどこでも使用できると思っているからである。「自らの母語については、自分がなぜそれを話していて、またなぜ理解できるかは、その理由を問わないほど当然のことであるから、他者も自分のこばを理解すべきであって、それを理解しないものには、何か致命的な欠陥があるからだと考える。他者が自らの母語を理解しないのは不可解である。自らのこば以外にまともなこばがあるとは思ってもみないからだ。じつは、母語とは最も意識にのほりにくく、発見しにくいものだ。』⁽²³⁾として母語は身体の一機能として本能的役割をしている。他言語学習したことのない英語話者にとって非英語話者がなぜ話すことができないのか、という母語話者基準で考えているため、非英語話者の外国語習得の労力と困難さが理解できないのである。

さらに英語圏の国々は第二次世界大戦で戦勝国であったこと、そして根強い反日感情が影響して英語を学ぶ人たちへの度量(Weiterzigkeit)や寛容さ(Toleranz)が欠如している。「<ありがとう><さようなら>のほかに日本語を知っているはずのない人から<あなたの英語は私の日本語より上手だね>と言われることもあるが、これは言い古されたジョークの一つだ。これは一種の侮辱である。こういう一言を聞くことで、言った人の心がわかることが多い」⁽²⁴⁾と、言語によるエリート意識と非英語圏の人々への文化的差別化である。とくにかつての第二次世界大戦の枢軸国への許しがたい戦争への憎悪と、英語力のない人たちへの言語的軽蔑である。「ドイツ文学者の池内紀さんがかつて、<イタリア語は学びがいのある言葉だ>と書いていた。理由が面白い。イタリア人は、こちらが多少の単語を話せるだけで自分たちに向けられたす

(21) 武蔵大学人文学部編、『多言語文化学習のすすめ』、朝日出版社、2008、P.281

(22) 市村卓彦、『アルザスの文化史』、人文書院、2002、P.449

(23) 田中克彦、『ことばとは何か』、ちくま新書、2004、P.85

(24) 山本麻子、『ことばを鍛えるイギリスの学校』、岩波書店、2003、P.204,205

てきな表敬>とってくれるからだという。その逆は、多分英語であろう。少しばかり話せてもほめられず、下手だと哀れに思われる。いまや世界語さながらに、わが世の春を謳歌して強気だ。その陰で多くのマイナー言語が消えつつあると――。世界には6千前後の言語があるそうだ。ユネスコが大がかりな調査をしたら約2500語が消滅の危機にさらされていた。一つの言語が生き延びていくには10万人以上の話し手が必要だという。ある一線を割れば坂道を転がるのは、生き物の場合と同じらしい。生物多様性ばかりでなく、言語の多様性も、この地球上で細りつつある。かつて、印刷術の発明は文字のない語を置き去りにし、ラジオ・テレビの隆盛がさらに、少数派の言語を追いやってきた。そして今、インターネットである。英語も大切だが、弱肉強食にまかせているのは多彩な文化は守れない。』²⁵として英語の優勢言語化していることで人種までもが優れているかに錯覚してしまう。これまでに非英語圏の人たちは人種的位置付けが下位にあるかのような気持ちにさせられた数多くの人たちがいるだろう。外国語を学ぶ時の喜びや感動は話す相手への心の伝達である。

もちろん英語は普遍語 (Allgemeinsprache) として学術研究の発表手段として、より多くの人に内容を伝える手段として、一カ国語の領域内だけでは非常に範囲が狭く限定されてしまうので、英語は経済効率的に広域に伝える利点がある。しかし、英語が普遍語であるという前提で他の言語を圧倒し、言語が一本化することで他言語が消滅していく恐さである。そういう意味で EU の言語政策はお互いの国の言語尊重を前提にしている。「少数派言語よりも有力な各国の主流派言語 (それぞれの国の公用語) にしたところで、すべての加盟国の公用語を EU の公用語にするという原則があるものの、現実の流通における優劣という問題は厳然として残っている。多数公用語主義は通訳・翻訳確保の困難という問題をかかえ、現実問題としては英語フランス語などの基軸言語を介したりレー通訳 (一種の重訳) とならざるをえない。加盟国数の増加に伴う公用語数の増大 (21世紀時点で11だった公用語は、2004年拡大で20となり2007年には23へと増大した) につれて、名目上の対等性と実質的な格差のギャップはますます深刻化しているように見える。』²⁶と、公用語が膨大化しすぎることは労力や時間の浪費になることもある。言葉の運用には限度が付き物である。だが、これを単純化し、少数言語を排他的に取り扱うことは文化消滅の要因につながっていくからである。多様な言語・文化を取り入れる寛容さがさらにこれからのグローバル社会には必要である。

(2010年9月27日受理)

²⁵ 朝日新聞、朝刊、「天声人語」、2009.2.25

²⁶ 塩川伸明、『民族とネイション』、岩波新書、2008 p.152